

卒業報告書

Department of Economics, Northwestern University

村上愛

2024年4月末に博論審査を終え、経済学の博士号を授与されることが決まりました。

博士論文では、経済史の観点から医学と社会の関係を分析することをテーマとして3本の論文をまとめました。今までにない新しい分野を作ることを目指して研究を行ってきました。博論審査委員の先生方から、分析対象、方法、結果の新しさを認めていただけたことは大変大きな自信となりました。また、40年以上学生を指導してきたメインアドバイザーの Joel Mokyr 先生に、今まで指導してきた博論の中で「one of the best dissertations」と言っていただけたことは何よりの褒め言葉でした。

博士論文の内容を紹介する前に、研究の背景から説明したいと思います。経済学は、もともと経世済民という語に由来するように、社会に生きる人々の厚生を高めることを目的としています。経済学は経済政策や市場取引の分析から始まりましたが、今ではその分析対象はありとあらゆる社会活動・社会政策を含むものとなっています。そのような中に、学問の発展とそれが社会的に及ぼす影響を分析する分野ができつつあります。現代では、専門知識をもった専門家の社会的役割は非常に大きい一方、一般人の専門家への信用が高くないことで問題も発生しています。つい数年前に生じたパンデミックと、世界中でみられた反ワクチン運動はその典型例といえます。私は特に医学における専門家と一般人の間に生じる経済学的な問題を分析することでこの新しい分野に貢献することを試みました。

それでは博士論文の内容を簡単に紹介したいと思います。

1本目の論文は、Supply and demand of medical knowledge というタイトルです。紀元前から19世紀末頃までの西洋医学史2000年余りを分析対象とし、1つのモデルで統一的に医学の3つの発展段階を分析しました。分析では特に、他の自然科学と異なっており、医療の専門家は患者という非専門家と市場を介した関係をもっていたことに着目しました。結果として、市場における競争が医学の発展に負の影響を及ぼし得る条件を明らかにし、科学的な学問の発展も社会・経済活動と切り離して考えることはできないことを論じました。

2 本目の論文は、Infectious diseases and conventional discrimination というタイトルの論文です。この論文では、医療政策が人々の病気に対する差別意識に及ぼす影響を分析しました。特に 20 世紀後半の日米のハンセン病政策をとりあげました。アメリカでは、日本よりも早く強制隔離政策が終了し、ハンセン病の元患者に対する差別も消失していったといわれています。一方、日本では 1990 年代まで隔離政策が続き、21 世紀になってもまだ元患者に対する差別がみられました。モデルを構築し、このような違いが日米で生まれた要因を理論的に明らかにしました。結果として、医療専門家の発言によって、社会の慣習を悪いものからよいものへと変化させることが可能であると示しました。

3 本目の論文は、Personnel selection and an epidemic というタイトルの論文です。この論文では、医療専門家の人事制度が病気の広がり及ぼす影響を分析しました。具体的には、明治時代日本の帝国陸海軍における戦争中の脚気の発生をとりあげました。海軍は早々に脚気対策として有効な麦ごはんを糧食に取り入れた一方、陸軍では、意図的に麦ごはんの導入をしない方針が決められました。そのため日露戦争では、海軍で脚気被害がほとんど出なかったにもかかわらず陸軍では多くの患者と死者をだしました。このような惨事に至った経緯を当時の人事制度を分析することで明らかにしました。当時、前任の責任者が後任を指名する制度がとられていました。このような制度のもとでは、前任の責任者が嫌うような新しい政策を支持しては、後継者に指名されない恐れがあります。そのため、上司を説得できるほど優秀でないかぎり、前任に迎合する態度をとることが最適となってしまいます。分析の結果、陸軍では、強く麦ごはんに反対する上司がいたために、後継者が上司にあわせた行動を採り続け、結果として多くの脚気被害を出した可能性があることと示唆されました。正しい医療政策を選択するためには、専門家をとりまく人事制度も考慮すべきであることが分かりました。

このように、3 本の論文をまとめ、博士号の取得も決まりました。しかし、いずれの論文も国際学術雑誌へ未掲載です。博士号を取得したとはいえ、研究で目指すべき目標に対してはまだまだ道半ばといえます。今後も、自分にしかできない研究にこだわり、経世済民のこころを忘れずに学術的な貢献を目指す所存です。

終わりにになりましたが、ご支援をいただきました船井情報科学振興財団に心から感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。